

■ ■ ■ 例会・研究部会要旨 ■ ■ ■

第280回例会

2014年3月21日 (金・祝)

於 大阪市立大学梅田サテライト
後援 大阪市立大学創造都市研究科
大阪市立大学都市研究プラザ

テーマ：グローバル時代における「場所」—ドリー
ン・マッシー氏を迎えて—

■ Repositioning place in a global age

Doreen Massey (Emeritus Professor of Geog-
raphy at the Open University)

人文地理学で、古くは表層的な領域や首尾一貫した
ものとして、その後にはグローバル化に対置するもの
として場所は理解されてきた。場所はアイデンティテ
ィの物質的基盤であり、外からの侵入を許さない、閉
じられ首尾一貫したものと捉えられる傾向にあった。
浸透的な資本の波から場所を防衛しぬくことが重要な
課題だった左翼も、場所を本質化してきた。しかし、
私たちの日常生活と同じく、場所もまたグローバルな
諸関係の産物である。閉じられることのない、つねに
作り上げられる場所なのだ。

開かれた場所という理解の仕方は、空間論的転回を
経るなかで主張されてきたフローの空間論や存在論的
な空間理解とは違う。フローの空間の論者としては、
マニュエル・カステルが挙げられるだろう。あらゆる
ものは資本や通信のネットワーク、フロー、動きだ
という主張がなされてきた。存在論的議論の代表者
として、アントニオ・ネグリとマイケル・ハートが
挙げられる。これらの議論では、場所は悪くフロー
はよいものと考えられ、あるいは場所は保守・反
動的なものとして前提される。場所は意味も実体
を持たないものとされる。

こうした考えには賛同できない。それには3つの理
由がある。第一に特殊性、種別性を重視する地理学
者として、全てがフローによって均質化するとは考
えられないから。第二に場所は実体を持ち存在す
ることを

観察してきた者として場所は依然として意味を持
つと信じるから。第三にフローの空間論者も存在論
的議論も「固定された場所」という理解に基づき批
判しているが、場所は開かれているから。したが
って私たちの課題は、場所を捨て去るのではなく、
それを概念化し直すことである。ではどのような
新しい「場所」を想像しなければならないのだら
うか。そのためには次の5点の前提理解が必要であ
らう。すなわち(1)場所は諸軌跡の分節化として
現れる、(2)場所はともに投げ込まれるなかで
作られる、(3)場所は予測不可能な出会いの
出来事である、(4)場所は時間の表面の一断面
ではない、(5)場所はつねに作られている、とい
うものである。

場所はつねに変動しながら作り直されている。自然
を考えてみよう。場所と同じように、自然もまた
帰るべき拠点としてしばしば想像される。しかし
自然もまた常に変動している。イギリスの国民
的精神の拠り所である湖水地方のスキッドー山
は、長い地殻変動の過程において現在、地表面に
顔を出しているに過ぎない。ドゥルーズを持ち
出すまでもなく、哲学的には場所の中にはさま
ざまな時間性 temporality が存在し、総ての
ものが動いている。人も人あらざるものも
プロセスの中にあるのだ。ハンブルグのエルベ
河床で発見された、氷河によって何千年も前
に南方へと押し出され、氷が後退するとこ
こに残されてしまった迷子岩。これはハンブル
グの地元のものだろうか。何年そこにいれ
ば「地元」になるのだろうか。ハンブルグ市
はこの岩にヒントを得て、「ハンブルク、世界
への玄関口」と題されたポスターを作成し、
開かれた都市をアピールした。それは浸透性
のあるものとしてこの場所を理解すること
をうながし、「自然の」諸軌跡と「文化の」
諸軌跡の両方の布置としての場所を生き
るように駆り立てる試みであった。所属
についての問いは新しい仕方です

それゆえ私たちは、場所やローカルなるものを単
にグローバル化の産物であるとか、犠牲である
(ローカルなるもののグローバルな生産)とか
ばかりを主張すべきではない。グローバルな
現象は場所の中に根を持

っていることに目を向けるべきだろう。これをグローバルな場所感覚と呼びたい。そうすることで私たちは、この広範な世界においてわれわれのいる場所がどのような役割を担っているか気づくだろうし、それに対する「場所の応答責任」の問題を引き受ける必要がある。それは「場所の向こう側にある場所の政治学 politics of place beyond place」である。そのなかで、開放的な場所だけが称揚されてはならない。押し寄せる資本や、移動させられる労働者を前にして、場所を閉じなければならぬ契機も確かに存在する。場所は関係的なのである。

では関係的な場所に対して私たちは帰属意識をどのように感じることができるのか。私たちは失われたもの、郷愁を誘うものとして場所を想像し、帰属意識を強めるべきではない。むしろ場所とは一つの（政治的）プロジェクトであり、他所への応答と交渉の責任が常に生ずる。そこに関わりどちらに与するのかという帰属意識が求められるのである。もちろん、場所は首尾一貫したものでなく、つねに分断があり、多孔的である。そのときどきに、プロセスとしての場所は姿を変えるだろう。だからつねに私たちは「この場所は何を意味し象徴しているのか」と問わなければならない。

なお、講演の内容は *For Space* (Sage, 2005: 邦訳『空間のために』月曜社) 第12章以降と関連している。

■ 討論とまとめ

討論に先駆け、マッシー氏が深く関わっている the Kilburn Manifesto, およびこの取り組みを一緒に行ってきたスチュアート・ホール氏 (2014年2月逝去) について、補足説明がなされた。

その後、場所のセンス、「場所の応答責任」、デヴィッド・ハーヴェイ氏との見解の異同、グローバルな場所、場所の多孔性と個人の多孔性の問題といった観点から質問が出され、それぞれマッシー氏から説明および補足がなされた。

イギリス地理学界をけん引する一人から、新著や現在の関心に基づいた最新の成果の報告を受け、討論する機会を得られたこと自体、大きな成果であったと言える。70名という参加者の多さもマッシー氏の議論に対する関心の高さを物語っている。また新著の翻訳がちょうど刊行された直後であったことは、議論の理

解を助けたと思われる。マッシー氏の意見を一方的に受容するのではなく、日本側からも質疑を通じて福島原発問題が国会議事堂前で抗議される件や東京・大久保のコリアンタウンの事例などが紹介されたこと、さらには地理学以外の日本人研究者からも積極的な質疑への参加があったことなど、双方向ないし多方向の意見交換ができたのではないかと思う。

なお、今回の例会開催は、熊谷圭一氏および水内俊夫氏がそれぞれ研究代表を務める科研のバックアップ、そして森正人氏の細やかなコーディネートなくしては不可能であった。三氏の多大な協力に対して、深く謝辞を述べたい。

(参加者70名, 司会: 上杉和央, 通訳: 森正人)

第115回 地理思想研究部会

2014年4月19日 (土)

於 滋賀大学大津サテライトプラザ

テーマ: 生活空間の観光化と地域住民の対応

■ 生活空間への観光のまなざしと住民の対応

—徳島県三好市東祖谷地域を事例として—

朝倉慎人 (京都大学・院)

本発表では、観光のまなざしから一定の距離をおいたホスト社会のあり方を問うために、文化の客体化を焦点化しない立場から、観光化に対する地域住民の対応に注目した。

近年の観光振興では、「新しい観光」の潮流と相俟って、地域住民とその日常生活のあり方が重要な観光資源として注目されている。このなかでは、地域住民が生活者としての立場を崩さずに観光の文脈に取り込まれ、彼らが観光のまなざしを意識せずに行う実践が、各人の意図をこえて直接的・間接的なたちで観光振興に資する状況も生まれている。こうした状況を捉えるために、文化の客体化を前提としていない、地域住民の実生活が営まれる空間を生活空間と定義し、観光空間と対置した。そのうえで、生活空間の観光化に、地域住民が生活者としていかに対応するのか、徳島県三好市東祖谷地域を事例に検討した。

東祖谷地域に対する観光のまなざしは、昭和初期から大きくは変化していないが、2000年代半ば以降、アレックス・カーの観光のまなざしが影響力をもってき

た。これは、彼が1970年代初頭に見出した真正な東祖谷の姿を念頭に、既存の東祖谷表象を捉え直したものである。当地では、2008年から、カーのグランドデザインによる観光振興事業が始まった。

次に、カーの観光のまなざしやそれを背景とした観光振興への地域住民の対応を、肯定、批判、不干渉の3つに分け、それぞれの代表的な人物の語りを紹介した。そのうえで、不干渉に分類した民泊実践者の語りを手がかりに、3類型に通底する特徴を検討した。観光のまなざしにほとんど関心を払わない地域住民のみならず、ある程度意識しているはずの地域住民であっても、個人的あるいは地域における自らの立場に起因すると理解すべき行動をとることが少なくない。彼らの実践の多くは、観光のまなざしではなく、各々の日常生活の経験に強く根ざしていると結論づけた。

こうした実践は「真正」で「素朴な」農村イメージに寄与し、地域住民の豊かな実践を支える一方で、行政・住民間の双方向的・協働的な観光振興を阻害する。こうした実践のあり方がみられる背景として、当地の地理的文脈に注目するならば、①観光業と当地の基幹産業・建設業の関係、②隣接する西祖谷地域との比較が重要であろう。これらの比較によって、東祖谷地域の観光業をめぐる状況の厳しさはより鮮明になる。観光業は経済的裏付けが薄い「趣味」的な実践とみなされ、実践者の一部が「変わりもの」とみられる風潮が再生産される。こうしたあり方は後発的で、「新しい観光」による観光振興が実施される地域で観察される。

最後に、事例地ベースで課題を述べた。本発表の中心をなす住民の語りは、2011年に収集したものだが、当地の観光振興事業は進行途上にある。当時はまだ事業の成果が見えにくい時期だったが、古民家宿泊施設整備完了(2015年)が近づき、現在は具体的な成果が求められる段階にある。こうした状況の変化のもと、住民の認識に何らかの変化があったのか、今後注目していく必要がある。

■ 質疑応答

問：観光のまなざしに関して、「観光者」と「観光客」のまなざしを使い分けているようだが、経営学などの用法を含め、どのように注意しているのか？

答：インフォーマントの発話のなかでは「観光客」を

使い、それ以外は「観光者」を使った。使い分けにこだわりを持っている人もいるし、翻訳の問題もある。

問：生活空間に注目することがニューツーリズムではない。しかし行政が観光による地域振興を画策し、観光空間が全域化しているとはいえる。このなかで地域住民とはだれなのか？間接的な実践者も含まれるので、ネーミングを検討すべきでは？

答：間接的にであっても観光振興に資する実践を行うのであれば、観光実践者とした。そうすると観光実践者の範囲が問題になるが、どこまで理論化するかは難しい問題である。タイトルと中身の整合性の問題もある。

問：インフォーマントが観光関連者であるのに、実際の生活空間が描けるか？

答：その点に配慮し、民泊関係者も入れた。彼らには観光にかかわっているという意識はない。そもそもアンケート調査に疑問を持っていて、聞き取り調査をしないと不十分だと考えている。とはいえ、インフォーマントをどこまで広げるかは難しい問題であり、今後は伝建地区での悉皆調査なども考えていきたい。

問：エコミュージアムの活動や生活空間の観光化として、考えてもらいたいことが2点ある。実践的に観光を誘致する人が、地域住民に地域のことを気付かせていくプロセスの先に観光化がある。その点で、地域住民をひとくくりにしていいのか。今回の事例では農村を調査の対象としているが都市空間の話のような気がする。調査対象を農村としていいのか。

答：1点目について、観光化に先立って視察やモニターツアーが行われたが、東祖谷地域ではその効果は限定的だった。2点目について、農村特有の現象ではないと思っており、着地点次第では今後、都市の話としても検討を行う必要が出てくるかもしれない。

問：過去に調査経験のある地域の話であった。流動的な地域であり、村の外で働いている人も多く、農業の場合も流動的だった。日系外国人労働者もいる。生活空間自体が想像の産物ではないのか。景観と古民家を照らし合わせると、生産の場としての山が衰退しているなかで、維持するシステムはどうなっているのか。

答：地域住民は山稼ぎのころから四国の中での位置性

を背景に広い生活圏をもっていたし、現在は車を使って広く移動できる。しかし観光客が訪れる具体的な場所、観光の文脈に取り込まれつつある住民生活が展開する場所は空間的に固定されている。古民家や景観の維持システムは構築されておらず、観光振興にはそのための手段としての側面がある。これからどうするのかという問題を抱えている。

問：地域社会の活動としてのにない手はどのようになっているのか？

答：観光まちづくり事業の実働部隊はNPOである。調査対象地はカーを通じて英語圏で有名であり、海外で感化されてやって来るケースが多いが、2～3年で人が入れ替わっている。伝統技術を若者と協力して伝承しようという動きもあったが、単発的であった。今回は調査対象から若者はずしたため、その他詳細については調査を要する。

問：写真のかかしにびっくりした。素朴に見えないシニールなアートである。閉ざされたコミュニティには不調和なものではないか？

答：ハンモックやバス停にかかしがあり（コミュニティバスなのでバスはほとんど来ない）、見方によってはきわめて不気味な空間である。一方で、テレビでかかしを見て涙を流した人もいるように、手に入らない人間の姿をかかしに見出す観光客も少なくない。人によっては癒しの空間でもある。かかしは服も靴も履いており、全国からそれらを送る人がいる。かかし制作者は県内各地にかかしづくりを教えに行っており、地域の人のなかには、かかしづくりを習いに行っている人もいる。ただし、住民が本当にいいと思っているかはわからない。

問：かかしについてはテレビ番組でも取り上げられていた。プラスの意味でこうした活動は広がっているのか。地区単位でのまちづくり協議会などはあるのか。

答：実際は地域の人に聞かないと分からない。何度かテレビで取り上げられているのは事実である。まち

づくり協議会の組織を作っているのは、伝建のグループ、東祖谷地区の村おこしグループ、(観光地化を進めている)西祖谷地区の人たちであり、地区単位のものはない。協議会での東祖谷からの参加者の役割は、基本的には決まったことの承認のようだ。行政とその委託を受けたコンサルタントが入っている。

問：生活空間の観光化の地域に対する意味はどうか。地域の若手が地域の価値を発見する、あるいは元気づけられるという効果や、ふるさと学習への影響はあるのか？プロジェクトがふるさと学習になっている場合、今後の方向性はどうか？

答：伝建地区指定をきっかけに、地元の小学校教員が伝建地区かるたを作った。また、郷土学習の一環として、地区内の畑で、ジャガイモの種の植え付けと収穫を行っている。現在は小学校が統合され、地元の小学校は使われていないが、新しい小学校でも継続している可能性が高い。

■ 司会所見

今回の地理思想研究会では、博士後期課程の大学院生に新しい観光地理学についての報告をお願いした。観光研究は地理学に限らず、各学問分野での注目度が高く、観光業界への就職を意識する大学生にとっても興味深いテーマである。丹念な現地調査に基づく報告であったがゆえ、知見をさらに深めるために次々と質問の聲が発せられた。人文地理学における少子化ならぬ院生少数化の中で、若手研究者と中堅およびベテラン研究者が長時間にわたって議論していく意義は重要である。2013年11月からの新しい代の地理思想部会世話人として、最初の研究会を無事に終了できた。このことを満足するとともに、今後も研究会を活性化させていくために、新しい研究動向や新鮮な報告者による話題提供を期待したい。

(参加者17名, 司会・記録: 香川雄一)

● ■ 彙 報 ■ ●

第2回評議員会 (2014年4月12日 於: キャンパスプラザ京都, 出席者18名)

〈報告事項〉
1) 庶務委員会 (田中理事)

- ・2013年度事業計画。
 - ・2014年1月、法人化準備の一環として、はるかぜ総合司法書士事務所（代表：内藤卓氏）と業務委託契約。
 - ・「第8回地域の安心安全マップコンテスト」への後援を承認（2014年2月21日）。
 - ・1月31日、はるかぜ総合司法書士事務所において、臨時理事会を開催。内藤卓氏を交えて、定款案等について協議。
 - ・2013年度と同様の内容で、事務局事務員との雇用契約を更新。
- 2) 会計委員会（出田理事）
- ・平成25年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）による企画として、2013年京都国際地理学会議におけるセッション開催、新規事業としての英文特集号の刊行、英文校閲、海外の主要関連学会誌の編集委員等110名に英文特集号を送付、Webでの論文投稿システムの導入について検討開始などの実績を報告予定。
 - ・会費納入状況と督促状の送付。3年未納者22名、2年未納者27名が除籍候補。
 - ・2013年京都国際地理学会議組織委員会から、2月20日に591.7万円の寄付申し入れ。
- 3) 編集委員会（生田理事）
- ・『人文地理』65巻6号と66巻1号を刊行。
 - ・『人文地理』65巻6号英文特集を、海外8誌の編集委員等（合計110名）に送付。
 - ・2013年京都国際地理学会議組織委員会からの、人文地理学会ホームページへの「会議報告」と「ご祝辞」との掲載依頼について理事会で検討し、承認。
 - ・『人文地理』編集に関し、編集委員会で整理した4つの論点を提示し、評議員会で質疑ならびに意見交換。(1)既刊雑誌のネット公開などのオンライン化、(2)雑誌の刊行数と発行体制、(3)編集作業のオンライン化、(4)会告の取り扱い。
 - ・ウェブ投稿に関する検討（中間報告）。
- 4) 集会委員会（八木理事）
- ・2014年人文地理学会大会（広島大学）の準備状況報告。大会準備委員に和田崇委員の追加が提案され、承認。法人化関連の会議のため、全体の日程とプログラムの調整が提案され、承認。
- ・例会・研究部会の活動報告と今後の予定。
 - ・2015年特別例会（6月）を宮崎大学または宮崎産業経営大学で開催予定。
- 5) 企画委員会（南出理事）
- ・3月26日、第6回地理学連携機構・地理関連学会連合・人文・経済地理及び地域教育関連学会連携協議会合同総会を開催。「高校地理歴史教育に関するシンポジウム」（6月14日）の案内。
 - ・3月28日、人文地理学会学会賞候補者選考委員会を開催。
 - ・日本学術振興会賞の学会推薦の申請なし。
 - ・関連学会・機関からの広報依頼の取り扱いについて意見交換。
- 6) その他
- (1)2014年3月『人文地理学事典』第2刷の刊行（300部）（田中理事）
 - (2)会員名簿の作成準備（田中理事）
 - (3)日本学術会議の活動報告（碓井評議員）
 - ・2014年6月14日に東京大学で開催される、学術会議主催の「高校地理歴史教育に関するシンポジウム」への会員の出席方要請。
- 〈審議事項〉
- 1) 除籍者の取り扱い（出田理事）
 - ・4月30日時点での2年以上の会費未納者を除籍予定。南出理事より、人文地理学会ホームページへの退会届の掲載について説明。
 - 2) 人文地理学会法人化の準備（山野会長）
 - ・一般社団法人人文地理学会定款（改訂案）、一般社団法人人文地理学会選挙管理委員会規程（案）、一般社団法人人文地理学会代議員選挙規程（案）、一般社団法人人文地理学会会長選出に関する規程（案）、一般社団法人人文地理学会理事・監事予備選挙に関する規程（案）、および新規に作成する人文地理学会会則（案）について、内容、変更・修正箇所の説明の後、質疑応答ならびに意見交換。会則（案）を除く、定款案、その他の諸規程案については、評議員会での議論を反映させた最新の改訂版を人文地理学会ホームページに掲載し、会員からの意見聴取を行うことが提案され、承認。7月開催の評議員会で引き続き細部について検討する。

■ ■ ■ 2013年京都国際地理学会議の会計報告 ■ ■ ■

2013年8月4～9日に、国立京都国際会館をメイン会場に、国際地理学連合（IGU）の2013年京都国際地理学会議が開催された。財務委員会による会計処理に長い時間を要したが、2014年4月末にようやく終了し、5月1日に監事による監査が行われた。以下は、監査を経た会計報告（2009年4月1日～2014年5月31日）である。なお、会議全体に関する詳細な報告は、『人文地理』66巻1号80～108ページに掲載済みである。

この会計報告の掲載をお認めいただいた人文地理学会に、深く感謝する次第である。

2013年京都国際地理学会議組織委員会

委員長 石川義孝

財務委員長 村山祐司

(1)収入の内訳

単位：円

科 目	決 算 額	備 考
参加登録費	58,023,200	クレジットカード決済手数料含む総額
ブース使用料収入	2,489,750	
寄付金	23,435,256	JNTO 手数料含む総額
補助金	23,070,000	
巡検茶話会参加費	2,776,500	
雑収入	9,600	
受取利息	5,020	
合 計	109,809,326	

(2)支出の内訳

単位：円

科 目	決 算 額	備 考
I 会議準備費	15,951,180	
1 人件費	669,740	
2 旅費	198,170	
3 庁費	15,083,270	
(1)印刷製本費	2,161,375	
(2)通信費	119,880	
(3)事務用品費	39,172	
(4)会議費	151,583	
(5)製作費	960,225	
(6)業務委託費	11,207,397	
(7)雑費	443,638	
II 会議運営費	64,859,055	
1 人件費	7,512,745	
2 会場費	3,374,225	
3 会場関係費	10,727,006	
4 機材関係費	1,726,450	
5 懇親会費	7,962,168	
6 飲食会合費	2,316,528	
7 看板ポスター施行費	1,852,767	
8 プログラム製作費	5,088,742	

9	ブース関係費	2,488,500	
10	招聘者関係費	1,921,554	
11	巡検茶話会関係支出	2,804,560	
12	謝金	1,912,020	
13	庁費	15,171,790	
	(1)消耗品費	340,203	
	(2)荷造運賃	180,475	
	(3)旅費	2,096,552	
	(4)通信費	403,417	
	(5)事務用品費	560,399	
	(6)支払手数料	3,814,460	JNTO 手数料等
	(7)業務委託費	5,489,753	
	(8)印刷製本費	1,784,670	
	(9)雑費	501,861	
Ⅲ	会議事後処理費	28,999,091	
1	人件費	596,609	
2	庁費	132,882	
	(1)雑費	132,882	
3	寄付金支出	28,269,600	10学協会への寄付等
	合 計	109,809,326	

(1)この表の形式は、日本学術会議に提出した会計報告書の形式に準じている。

(2)この報告には、2013年京都国際地理学会議の共催組織であった日本学術会議からの助成額（京都大学百周年時計台記念館使用料105,000円、京都国際会館使用料6,213,217円、海外からの基調講演者の滞在費補助330,750円、合計6,648,967円）は、含まれていない。

(3)この会計報告は、KDA 監査法人の公認会計士の井西祥仁氏の指導を得つつ作成し、組織委員会監事の長谷川孝治氏と手塚章氏の監査を受けたものである。

… 第52回 都市圏研究部会 …

共 催：経済地理学会関西支部

日 時：2014年10月4日（土）13:30～17:00

会 場：神戸大学梅田インテリジェントラボラトリ（梅田ゲートタワー 8F）

大阪鶴野町郵便局の北にあります。会場へのアクセスは、以下をご参照下さい。

http://www.b.kobe-u.ac.jp/access/osaka_room/

阪急「梅田」駅徒歩3分、JR「大阪」駅徒歩7分。入口がわかりにくいのでご注意ください。

正面入口が閉まっているときは、夜間通用口でインターホンを押してください。

テ ー マ：シンポジウム「持続可能な大都市のものづくりと街づくり」

趣 旨：脱成長社会を迎えた日本における持続可能な都市空間の形成に関する議論にあたっては、生産機能の持続性の検討は欠かせない。そこで、都市経済の持続的発展の方向性を模索するために、主として産業集積、都市の外部経済の実態、都市の工業空間の変容、生産機能の多様性および都市の創出するイノベーションについて議論する。

オーガナイザー：日野正輝（東北大学）、西原純（静岡大学）、阿部和俊（愛知教育大学名誉教授）、石丸哲史（福岡教育大学）

話題提供者（発表順）：

東京のものづくり産業集積の現在——大田区を中心に——……………小田宏信（成蹊大学）

東京城東地域におけるものづくり作家の増加にともなう皮革産地の変容

……………山本俊一郎（大阪経済大学）

アニメーション産業集積におけるスタジオの役割：スタジオ M 労働者の転職行動を事例に

……………山本健太（國學院大學）

ポスト・パネルベイの大阪湾ベイエリア……………加藤恵正（兵庫県立大学）

コメンテーター：水野真彦（大阪府立大学）、森山敏夫（尼崎市経済環境局）

座 長：伊藤健司（名城大学）、石丸哲史（福岡教育大学）

連 絡 先：豊田哲也（徳島大学）E-mail:toyoda@ias.tokushima-u.ac.jp

石丸哲史（福岡教育大学）E-mail:ishimaru@fue.ac.jp

※上記の情報は、都市圏研究部会 HP <http://metropolitan.blog68.fc2.com/> においてもご覧いただけます。

… 第136回 歴史地理研究部会 …

日 時：2014年10月25日（土） 13:30～16:30

会 場：やまと会議室 5階中会議室

近鉄「奈良」駅徒歩3分

<http://www.yamatobill.jp/index.html>

テ ー マ：近世都市と祭礼の歴史地理

趣 旨：近世日本の都市に関する歴史地理学では、近年、①土地利用・管理の再検討と、②祭礼と都市空間との関わりが、重要なテーマとなっている。そこで今回の本部会では、②を焦点として2名の中堅研究者に報告とコメントをお願いした。渡辺報告は、副題に挙げられた両城下町に関して、中近世移行期から近世末期までの祭礼内容とその担い手の変化を、通時的に解明するものである。両城下町においては、祭礼内容とその担い手の変化期がいずれも2回あり、それぞれ領主と町人の動向が関わっていた。まず17世紀半ばには、幕藩の意向を具現化する形で、城下町町人の参加による仮装行列という祭礼内容の変化が見られた。次に、上野では18世紀末期以降に、烏山では17世紀後期より、主たる祭礼内容が「祭車」となっていったが、その時期は両城下町における町人の意思や、祭礼への町外者の参加の度合いに応じて異なっていた。

研究発表：近世城下町における祭礼の変化に関する歴史地理学的研究

—伊賀国上野および下野国烏山を事例として— …………… 渡辺康代（帝塚山大学）

コメント：本多健一（立命館大学・非）

連絡先：米家泰作（京都大学）komeie.taisaku.8s@kyoto-u.ac.jp

※上記の情報は歴史地理研究部会 Facebook ページ（www.facebook.com/rekishichirikenkyubukai）でもご案内しております。